

センス・オブ・ワンダー観察会  
2026年2月21日-22日 清里高原 報告書

舟生真純

清里の自然観察会には、いつも子どもを連れて参加させていただいており、今回で3度目になります。今回は、初めて冬に訪れ、これまでとは異なる季節の清里の自然を体験することができました。

当日は、2月と思えない暖かさで、雪靴を買って挑んだ私は、拍子抜けしてしまいました。やはり気候が変動しているためでしょうか。例年だと雪が歩道にもどっさり積もっている頃だそうです。ほとんどの雪が溶けてしまっていたのは残念ですが、日陰に残っている雪だけでも子どもたちは大はしゃぎでした。

プラネタリウム解説員をしていた私にとっては、夜の時間が最も期待していた時間でした。夜も快晴となり、見上げた空には、漆黒の闇に無数の星がきらめいていて、圧倒されました。都会と比べて、ここでは、夜空の黒色が深いと感じました。深い闇があるからこそ、星の輝きとのコントラストがいっそう際立ちます。都会のぼんやりとした灰色の夜空とは全く別のものでした。星を見上げた場所は、丸い敷地をぐるりと森が囲み、まるでプラネタリウムのようなようでした。本物の星々が夜空を飾る最高に贅沢なプラネタリウムです。オリオン大星雲やプレアデス星団など、都会では見るのに苦労する天体が肉眼で簡単に探せることにも驚きました。

星空に感動したあとは、暖かい部屋に戻り、ホットドリンクを飲みながら、笹井さんに農業のお話を聞かせていただきました。プロジェクターから映し出される、農村の一年を伝える写真の数々。豊作を祈り、作物を育て、収穫を喜び、酒を酌み交わす。それは古くから続いてきた、人間の営みそのもので、それが今も息づいている。自然とともに生きることこそが、人間の原点なのだと改めて強く思いました。

初対面だった子どもたちが、少しずつ打ち解けていく様子を見るのも、この旅の楽しみのひとつです。自然探検では恥ずかしそうに、ひとこと、ふたこと交わすだけだった子どもたちですが、一緒にお風呂に入り距離を縮めたようでした。夜ふかしをし、雪を投げ合い、帰る頃にはすっかり打ち解けて、名残惜しそうに「絶対また来たい」と話していたのが印象的でした。

今回も、センス・オブ・ワンダーを全身で体感する旅となりました。感染症流行の時期でもあり、残念ながら参加できなかった方もいらっしゃいました。また次の機会に、自然の中でご一緒できることを願っています。

